



他人のiPS細胞からつくった網膜細胞の移植手術を実
施し、記者会見する理化学研究所の高橋政代プロジェ
クトリーダー ©時事

人なりに納得して生きられる日本
になるかも分らんよ」って伝え
たら、彼が「ぜひ一緒にそんな活
動をしたい」と言ったんですね。
また別の重度障がい青年はこ
んなことも言いました。「コンピ
ュータが何ですごいか分かる？ コ
ンピュータがあれば、アメリカと
日本の間に海があったって、同じ
仕事のやり取りができるんやで。
そしたら、僕が会社に行けなくて
も自宅に仕事に来るんか」と。

これはすごいこと言うなと思って。
そうして同じ思いを持つ仲間
集まってもらい、コンピュータな
どの科学技術を活用してチャレン
ジの就労支援を行う草の根団体、

プロップ・ステーションを一九九
一年に設立しました。スローガン
には「チャレンジドを納税者にで
きる日本！」を掲げました。これ
が活動の始まりです。

高橋 そうだったんですね。「プロ
ップ・ステーション」という名前
はどこから来ているんですか。

竹中 この活動を始める時に、S
くんに「グループの名前何にしよ
うか？」って相談したら、「プロッ
プにしよう」って言ったんですよ。
「プロップって何？」って聞いたら
「自分がラグビーをやっていた時の
ポジションなんだ」と。

「いや、ラグビーチームをつくる
んちゃうねんから」って言ったん
ですけど、彼が調べたら「プロッ
プ」には支柱、つかえ棒、支え
合うっていう意味があって、私は
すぐに気に入ったんですね。

高橋 ああ、支柱、支え合い。

竹中 なんでかというのと、いまま
での世の中は、障がいを持つ人は
支えられる人、障がいを持たない
人は支える人、というのが常識で
した。でも、私たちが始めようと
している活動は、障がいがあると
かないとか、若いとか年寄りとか
関係なく、自分ができることで皆

が支え合っている世の中にして
いこう！ というものだったから
です。だから「プロップ」という
言葉は、まさに私たちの活動にば
っちりやと思いました。

あと、「ステーション」は駅とい
う意味ですけど、列車は駅でポイ
ントの切り替えをするじゃないで
すか。皆も私たちの活動で発想の
切り替えをしてほしい、そういう
思いから「プロップ・ステーショ
ン」という名称にしたんです。

自分の道を ぶれずに進むもう

竹中 政代さんはアメリカに行っ
た後、どのように眼科医、研究者
の道を進んでいったんですか。

高橋 一九九七年、新しい治療法
をつくるぞと思ひ込んで、意気
揚々と日本に戻ってきて、臨床医
として患者さんを診ながら、京都
大学で再生医療の研究に取り組む
ことになりました。

当時は、アメリカでのボスや多
くの研究者、眼科医からも「そん
なことできるはずがない」と大笑
いされたんです。

竹中 理解されなかったと。
高橋 それは、当時の眼科医は神

経幹細胞の世界トップレベルの研
究をまだ知らなかった、実際に患
者さんと接しない基礎研究者には
少しの改善でもどれほど喜んでも
らえるのかという患者さんのニー
ズが分からなかったからなんです。
だから、いくら笑われても私が
周囲に説得されなかった、研究を
諦めなかったのは、自分のほうが
彼らよりも情報の幅が広いとい
う思いがあったからなんです。

それから、研究を始めると周り
がいろんなことを助言してくださ
るんですけど、ある人は「こうし
ろ」と言い、別の人は逆のことを
言う。それが続くうちに、「人の言
うことを聞くよりも、最後は自分
の思った通りにぶれずに行くこと
が一番や」と思うようになりまし
た。ただし、情報を誰よりも広く
多く持っている上で、です。

竹中 なるほど。ただ、実際に研
究を進めていくのは、すごく大変
だったんじゃないですか。

高橋 ええ。当初は、脳も網膜も
同じ神経だから五年か、長くて十
年で治療の目途がつくかなと思っ
ていたんですけど、そうは簡単じ
やなかった。やっぱり脳と網膜で
は幹細胞の種類が違い、脳の幹細